

第一章 虢州

大唐の咸通（かんつう）二（八六〇）年夏。虢州（かくしゅう）の我が家へと韋荘は向かいつつある。

韋荘は本来多情の人。自身はまだその本性に気づいていない。生まれてから勉強一筋、書物にあることならいくばくかの知識を得たものの、己についてはろくろくわかっていない。

いま歩くこの韋荘が、人生を誤る危うい瀬戸際にあるのか、それとも、本来の道へと踏み出す好機にさしかかったのか、そのどちらであるかは、結局のところ、これからの韋荘自身が決めるのだろう。

韋荘は開成元（八三六）年の生まれ、二十七歳である。出身を問われれば長安南東の京兆杜陵（けいちようとりよう）と答えるのが韋家のお定まりだ。実際

に住むのは長安と洛陽のほぼ中間の虢州である。

長安を出て東へと歩むと潼関（とうかん）の関所がある。素性に怪しいところがあれば厳しく問いただされ、何かしら商売の種になる物品を所有していれば容赦なく税を取られる。韋荘は幸いにも立派な家柄の子息であり、不幸にも携行するものはない。都でほとんど使い切ってしまったのだ。

長安と洛陽（らくよう）を結ぶ街道は唐の全土でも最も良く整備されている。西にある長安は西京（せいけい）と呼ばれ、東にある洛陽は東京（とうけい）と呼ばれる。この二つの都市を含む地域が唐の中心で、皇帝の威令がここには直接に及ぶ。この街道を歩く限りは、大唐の御世は安泰であるかに見えるが、ここを離れば事情はかなり違う。

潼関を通過すれば虢州まではずぐである。道がはかどるのは今の韋荘にとつては嬉しくない。都を発つてから、目ぼしい町ごとにあえて一日とか二日とか余計に逗留し、雨が降るたびに足を止めた。それでも半月もあれば帰りに着いてしまう。わずかに残っていた銭は底をつき、むろん酒などは飲めない

から、からだの芯にまで染み込んでいたその臭いはどうやら抜けた。しかし、心の方はなお妓館に留まったまま、己の身の内に戻り切ってはいない。

一年近く前に我が家を発つてこの道を逆の方向へと歩んでいったときの品の良い貴公子然とした姿と、いま戻ってきたこの姿との違いはどうしたことか。着崩れたまま身に馴染んだ衣服には、隠しようもない脂粉の薫りがまだある。勉強しか知らなかった韋荘がこうなろうとは、本人自身が一番思っていなかった。

「ほら、見えてきましたぞ。三本柳。あれさえ見えればあと一息。日が高くにある間に楽に着けましょう」

一歩前にあつて腕を伸ばして先を指さすのは、下僕の楊金（ようきん）である。子どもころから楊爺（ようじい）と呼び習わしている。齢は五十前だ。

韋荘はわずかに顔を上げ、

「そのようだな」

気のない返事をする。

広い街道がゆるやかに曲がり、三本かたまつて生える大きな柳がその先にある。右手に一本の道が、収穫の終わつた麦畑の間へと分かれる。唐土の農民は夏と秋の二度、税を納める。刈つた麦の大半はその夏の分として徴収される。道は緑の濃くなつた林の縁を巡り、彼方の低い丘へと続く。丘の向こうに川がある。粗末な橋を渡り、桑畑で埋まつたなだらかな斜面を横切れば、韋荘の家は間近となる。

韋荘は小さな莊園を先祖から受け継いだ。立派だつた先祖が獲得してくれた特権のおかげで、夏と秋の税は納めなくてすんでいる。それでも、所有する土地に対する税はなかなかの負担である。

一年ぶりに見る柳であるから、少しは懐かしく感じても良さそうなものを、韋荘はうつむき、できることならここで足を向け直して、長安に引き返したくなる。戻るのは、妓館のあの女のもとだ。女を想うといささかの感傷を覚えるが、何が何でも会いたいというほどではない。とにかく家に帰らずにいられ、他の一切を考えずにすむ悦楽を与えてくれるのならそれでよい。

都には戻れない。金は使い果たした。叔父の韋韜（いとう）が十分に用意してくれたのに、帰りの道中に必要な最小限の額だけになってしまったときに、楊爺に背中を押された。本当なら、春のうちに戻っていなければならなかった。貢挙（こうきよ）の試験に落ちたのだから都にぐずぐずいても用などない。

貢挙とは唐の官僚になるための試験である。韋荘は其中でも最も難しい進士科を受けるために、虢州の知事の推薦を受けて都に上った。貢挙は筆記試験で、これに合格すると官僚になる資格が与えられる。実際の職を得るには、実技試験とも言うべき銓試（せんし）もある。皇帝に仕える身として恥ずかしくない立派な風采であるか、言葉遣いがきちんとしているか、口跡が聞き苦しくないか、きれいに字が書けるかなどが審査される。それは要するに、貴族と並んで宮中に立つても見苦しくないかが問われるのである。唐の時代の初めのころは、官僚のほとんどは貴族出身者だった。貴族は貢挙など関係なしに枢要の地位へと昇れる。貴族以外の人間は貢挙を受けねばならず、しかも朝廷の威儀を保つには貴族的雰囲気保持が重要とみなされ、銓試が課

せられる。韋莊は銓試の方にこそ絶対の自信があった。顔立ちは美しいし、身のこなしは優雅であるし、発声も明瞭だし、筆さばきもみごとである。

貢挙は誰でも受けられる建前になっているとはいえ、実際には、相当の資産を要する一大事業である。何十年も勉強を続けないとならない。進士科は五十歳で受かれば若い方などと言われる。その日の暮らしに追われる庶民には端から無理だ。韋莊は都に近いところに住むからまだましたが、遠い地方の者は、試験を受けるために都に上って滞在するだけでも大変である。

貢挙に金銭と時間の相当な投資をしても、合格すればその見返りは絶大だ。順調に出世を果たすにつれ、数々の特権、多くの資産が自ずと身に備わる。それは親類縁者、そして子孫にも及ぶ。だから我も我もと貢挙を目指す。合格者は年にせいぜい二十人か三十人、受験者百人に対して一人に満たない。非常な難関であるから合格すればそれこそ天にも昇ったような気持ちで、連日の祝宴で大いに浮かれる。宴には都の妓女が大々的に動員される。普段は上客とは無縁の三流どころの妓女もこの機会に大いに懐を潤す。不合格者は

そうした大騒ぎを横目にすごとこと郷里に帰る。

三本柳を前に見てから、楊爺は心なしか足を早める。楊爺としてはもう安心だろう。供としての役目がこれで終わる。往復の旅も、都での生活も、勉強以外のことは何も知らない韋荘の面倒を全てみてきた。赤ん坊のときから数年前まで韋荘のそばにずっといた。韋荘にとって是最も気安い相手である。楊爺は都生まれで、大勢の知り合いがいる。弟の楊銀は商売人で、妓館であるの女と馴染みとなったのは楊銀がよろしくやってくれたからだ。

試験には合格するはずだった。都へと発ったのはほぼ一年前の夏の終わりの朝早く、一族全員の見送りを受けた。老いた者から赤ん坊まで数えろと、韋姓を名乗る男子は二十人に達する。女やいろいろな縁者が数十人余り。それぞれの家で使う男女や小作人、それにその家族などが二百人近く。虢州郊外の韋荘の莊園には合わせて三百人ほどが住む。その一族郎党の将来が、己が合格するか否かにかかっているのを、見送りを受けた韋荘は改めて強く感じた。合格すれば、四代前の韋応物（い おうぶつ）以来の快挙だ。韋応物は蘇

州の知事にまでなり、詩の大家としての名も残した。七代前には宰相になった韋待価（いたいか）もいた。つまり韋荘は名家の生まれである。だからこそこれだけの人数が住む荘園を所有していられるのだが、曾祖父の韋厚復（いこうふく）、祖父の中瑩（ちゅうえい）、父の韞（おん）は取り立てて為すところがなく、とくに父が若くして死んだこともあって、家運は近年目立って衰えた。

唐はその全盛期を疾うに過ぎて財政が逼迫し、先祖が獲得した特権や過去の遺産に必死にしがみつく家を、以前のように目こぼししなくなった。いくつか名目で新たに税を課し、都に近い地域で特に厳しく取り立てた。韋家の荘園はそうした変化をまともに受け、資産がじりじりと減った。

韋荘は都の屋敷で生まれた。八歳のときに父が死ぬと、すぐに屋敷は引き払わねばならなくなった。都周辺に何箇所かあった荘園が順に人手に渡って、いまでは虢州の一箇所だけだ。一族の皆がそこに集まったために広さの割に頭数が多く、収支は常に赤字である。それでもまだ先祖の信用で金を貸してくれる相手があり、どうにか名家らしい体裁を保っている。そうした苦しさ

も、韋莊が合格さえすれば一気に好転し、一族の将来は洋々たるものとなる。都に再び屋敷を構えるのも夢ではない。

試験を受けるために長安に滞在していた間に、韋莊はかつて住んでいた家のあたりを、楊爺の案内で訪ねた。二十年が経ち、建物が変わり、おぼろな記憶と目の前の光景とを結びつけるのは難しかった。長安の街は、坊という百十六の方形の区画に分かれ、坊は四周を壁によって囲まれる。その壁際を流れる水路には見覚えがあった。子どもの目には大きな川のように見えていたが、実際には跳べばまたげそうな細いものだ。その脇で、隣の李家の兄弟とよく竹馬に乗って遊んだ。その李家の方は以前の構えのままのようだったので、楊爺に様子を尋ねさせると、住人は入れ代わっていた。李家の兄弟の下にまだやっと歩けるばかりになった小さな妹がいた。その娘も今では二十歳を過ぎて、どこかに嫁にいき何人か子もいるのだろうかと思うと寂しく思えた。

一年前に虢州の家を出発したときには、一族の期待に応えようとの気構え

で、明るく笑って自信のほどさえ見せた韋壯であった。叔父の韋韜を中央に、屋敷の前の広場に皆が並んだ。妻と息子と娘もいた。そのときに妻がどのような顔をしていたのか覚えていない。たぶん見なかったのだろう。五歳の娘の彩霞（さいか）は怒ったような顔をしていた。それはいつものことで、母に似るその眼には、なぜか睨まれているように感じる人が多い。三歳の息子の純は離れたところで身を隠すようにしていた。息子はいつもおどおどしているように見える。己に似たようだ。二人の弟と、二三の者が小川の粗末な橋までついてきた。そこで最後の別れをすると、あとは楊爺と二人だけとなり、三本柳の下をくぐって街道に出た。そのとき、急におかしなことを思った。もしも不合格となつてこの柳の下に戻ってきたならば、己はどんな思いを抱くだろうか。万一現実になつてしまふよりも前に、あらかじめいまから考えておいたならば、いざというときに少しは気が楽になるのではないかとも思った。本気で不合格になつた場合のことを考えた訳ではなかったし、まさか本当にそうなると思つたのでもなかった。

実際のところこの身は不合格となり、三本柳はすぐそこである。右に折れて道を進めば、一族の人々と顔を合わせるのもじきだ。こんな屈辱の日が二十七歳の己に用意されていたとは。

これまでの生涯のほとんどが貢奉を受けるための日々であった。長安の屋敷にいた幼いときに勉強は始まっていた。李家の兄弟と一緒に、隣の坊の寺に住む師匠の元に通った。父は貢奉を受験する才がないのに苦しみ続け、いつも暗い顔をしていた。息子にこそはと期待をかけ、名高い師匠を選び、多額の謝金を投じた。韋荘には勉強以外では記憶に残ることがほとんどない。ある日、師匠に所用があつて、課題を置いて出ていったときに、李兄弟にそのかされて部屋を抜け、寺の高い楼に登った。軒の裏に鳥の巢を見つけ、雛を取ってやろうと、三人で梁にぶらさがった。「先生が帰ってきたぞ」の声に、李兄弟はさつと降りて逃げた。二人に比べて動きの鈍い韋荘は降りようとして怖くなり、進退に窮した。記憶はそこまでで、その後どうなったのか、たぶん楊爺が救ってくれたのだろう。

父が死ぬと都の北東にある下邳（かけい）の町に移り、そこで別の師匠にいた。息子の勉強のためなら母は金銭を惜しまなかった。厳しい人だった。韋荘の記憶に、背を丸めて妻の叱責に耐える父の姿がある。そうならぬよう、母の期待に応えるべく懸命に努めた。その母も二年後に死に、ひどく悲しい思いをしたが、心の片隅では少しばかりほっとしたのも事実だった。しかし、貢挙に合格するのが母と父への最大の供養と考え、いつそう勉強に打ち込んだ。このころから二人の弟、韋莠（い ゆう）と韋藹（い あい）も勉強を始めた。ところが、師匠は二人の弟には見込みがないとすぐに見切りをつけた。莠は書物を開くと眠ってばかりだったし、藹は簡単な挨拶さえできず、いつもとろんとしたさえない表情だった。勉強から離れると、莠は算術に興味を興味を持つようになり、藹は書物の文字面を覚えることに尋常でない能力を見せるようになった。莠は目につくものなら何でも数え上げて奇妙な計算に耽り、藹は文字が書いてあるものなら片っ端から棒暗記しようとした。二人ともそれはそれで非凡な才と言うべきだろうが、何の役にも立たず、もちろん貢挙

に受かる可能性はまるでないから、長男である己がしつかりしなければならぬと韋莊はより強く思った。

父母が死んでから、一族の財産の管理は父の弟の韋輶（い ちよう）の手に移った。輶はひと癖ある叔父だった。兄から受け継いだ財産でうまいことしてやろうと目論み、結構儲けたようだ。利を得れば妻も知らぬところに隠し、損をすれば莊園の方におつつけた。それでも家財の目減りはまだ小さいものだった。

韋輶は洛陽の妾宅でぼっくり死んだ。そういう女がいて、息子までもうけていたことを、一族の者は誰も知らなかった。

韋輶の後をその下の弟の韋韜が継いだ。恐ろしく浮世離れした叔父で、世事に疎いことを本人も良く弁え、莊園経営は任ではないと逃げ腰だった。他に代わる者がいなかった。韋輶の妻の薛（せつ）未亡人が意欲を見せていた。夫が不可解な死に方をしたのを恨んでいる様子があまりに露わであったし、もともと皆に好もしく思われていなかった。薛未亡人には韋莊よりも年上の

長男と次男がいて、父親の悪いところだけを受け継いだのか、ぼんくらでわがままである。薛未亡人と二人のどら息子が勝手放題をしたら大変なことになると、人々から忌避された。韋韞の二男に、また別の妾の子である韋愠（いおん）がいる。これはまだ若く、その母は薛未亡人にいびり出された。

本来なら後を継いでも良い韋莊ではあるが、一族のために貢挙の勉強に専念しなければならぬので、叔父の韋韜の出番となった。韋韜は兄の韋韞の不始末のけりをつけようとして借りたのが実に筋の悪い金で、急速に経済状況が悪化した。下邳の土地も手放さざるを得なくなり、韋莊は師匠と別れて虢州に住まいを移した。それからは一人で勉強するようになった。十六歳のことである。

二十歳で妻を迎えた。男というものは一人でいると余計な想念にとらわれ、勉強どころではなくなるとの叔父の配慮による。もちろん、韋家の直系の男子として先祖の祀りを絶やさないうために、韋莊には男子を儲ける義務がある。嫁にきたのはそれなりの良家の娘で、いずれ韋莊が官僚になる際に、妻とし

て恥ずかしくない各種の素養を備えていることが十分に保証された。婚儀を終えて初めて顔を見ると、美人の類に入る女であると韋莊は思った。まずまず結婚に満足してしかるべきであったのだが、どこか己の心に適わないものがあるはずと感じ始めた。それでも型通りの夫婦として暮らし、妻は一家の中にそれなりにおさまり、長女が生まれ、続いて長男が生まれた。子孫を得てひと安心と言ふことか、妻から気持ち遠のいていくばかりであることに、韋莊は悩まされるようになった。夫婦としての体裁を保っていれば、それでもすむのだろうか、妻の眼差しがいけなかった。己を隔てさせるものがそこにあると感じ、眼の動きがいちいち気になった。そのうち、声もいけなくなった。妻が煩わしくてならず、勉強を口実に、己の部屋に籠るようになった。その後は、夫婦の間は二度と良い具合にならなかった。

妻は年中苛々している。しばしばからだの不調を訴え、子どもの世話は乳母に任せ、寝たり起きたりである。夫婦の間ばかりでなく、韋莊の叔父や兄弟、あるいは叔母、従兄弟たちとも頻繁に言い争いをする。すこぶるやか

いである。一族の長である叔父はそうしたいざこざを裁く巧みさは備えていない。叔父の妻は早くに亡くなり、一族の女たちに睨みをきかず立場の女性がない。薛未亡人が出しゃばるとんでもないことになる。それで、韋莊夫婦は主人屋敷から出て、別の家を構えるようになった。そこでは完全に妻の天下だ。結婚のときに連れてきた小間使いの老女と、乳母の二人の女は妻の言うことしか聞かない。楊爺は妻に嫌われて家に入ることも許されない。仕方なく離れの書堂を建て、そこで韋莊は寝起きし、妻や子どもたちと何日も会わないのも普通だ。

このような状況を変えるのは試験に合格することしかない。韋莊は官人として莊園を出て外で働くようになるし、妻は妻で、官僚の夫人として韋家一族に対して采配を振るえるようになる。叔父だろうが薛未亡人だろうが、誰にも文句を言わず、妻としては大満足だろう。

何はともあれ、韋莊は勉強ばかりしてきた。二十六歳のときに己の力を自分で計ってみて、これならきつと合格できると考えた。貢挙を受けるのなら

最も難しい進士科だ。合格しやすい他の科もあるが、後の出世が違う。宰相になれるのは、貴族の子弟か進士科の合格者だけだ。進士科の試験で最も重視されるのは詩や賦だ。これにこそ韋荘は自信がある。四代前の韋応物は詩の大家で、韋荘はその才能を受け継いだ。自作の詩を都の有力者に送り、多くの賛辞をすでに得ていた。虢州の知事も感心し、その知事の推薦によって貢奉を受ける資格を得て都に上った。受験の準備期間も含めて、半年ほどの都での生活のために、叔父は代々家に伝わる書画の類を売って金を整えてくれた。

こうして万を持しての受験だったのだが、不合格となった身を二本柳の下に持って帰ったのである。楊爺は韋荘の心などまるで知らぬように、心なしか早足となって、柳には目もくれずに道を曲がっていく。

このようにしては戻ってきたくなかった。だから、都の妓館でぐずぐずとしていた。時というものの訪れは必ずやある。いまはすでにここにきてしまった。柳をちらりと見上げる。この前は夏の日照り続きの後で、乾いて緑を

失った葉がかなり抜け落ちていた。いまは縦横に葉が青々と繁っている。あ
のときに不安はあった。落ちたらどうなるかと想像もした。しかし、希望の
方が遥かに大きかった。合格したらと想像を巡らせば、数限りない楽しいこ
とが浮かび、そうなる以外の未来はあつてはならないと思つた。

事は終わった。貢挙はこうなつて、その結果は変えられない。まだすまな
いのは、一族の者と顔を合わせるのだ。それがこれからある。どのような
顔で、あの親類縁者の前に立てば良いのか。最も嫌なことがこの先に待つて
いる。

もしも合格していたなら、先触れが走り、一族の者は挙つてここまで迎え
にきただろう。都からだつて楊爺と二人で歩いてきたりしない。馬に跨り胸
をそらせ、何人もの供人を従えていただろう。

韋莊は首を垂れる。小さな荷を背に負う楊爺の後を追つてしおしおと己の
足で莊園まで歩くしかない。

貢挙は今年で終わりではない。皆に向かつて一言詫びて、次の機会にまた

受け、今度こそ合格すると決意を述べれば、許さないという者はいないだろう。それはわかっている。それ以外にはないともわかっているのだが、己にはできそうにない。都にいたときからそう思っていた。ここにきて、その思いがいよいよ強まり、どうにもならないほどだ。次に受けても、今日のこの同じ思いでこの柳の下をくぐって莊園に帰ることになってしまいそうに思える。そうなるのなら、二度と貢奉は受けたくない。もう一度今日と同じことなど自分にはできない。一回だつてすでにできないのだから、もう一度など到底無理だ。まして、三度、四度と繰り返すなど。

不合格となつたとき、韋莊の手元にはそこそこの金がまだあつた。叔父が苦しい中で用意してくれた金なのだから、大切に残して帰るべきだつた。それもよくわかつていた。叔父は好人物だ。不得手な莊園経営を引き受けてくれているおかげで、韋莊は俗事に一切煩わされることなくこれまで過ごせた。叔父は人に騙されたり、脅されたり、役人とのいざこざで何度も不快な思いをさせられたりしながらも、嫌な顔を見せずに家業に取り組んでいてくれる。

叔父は本来は人との交わりを絶って山水に親しむのを好む。先祖の韋応物の詩を朗誦しつつ野山を一人歩くのが、叔父の最高の喜びである。韋応物に最も似ると言われ、もしも真面目に勉強したならば貢挙に合格できるくらい之才もあったのだろうか、「これは私が詠んだのと同じだ」と、若いころから韋応物の詩に溺れ、他には何も求めないのだった。韋荘の父には、この弟が貢挙を受けてくれれば助かるのにといい思いがあったのかも知れないが、その一方で、純粋な弟を俗塵に汚れさせたくないとの思いもあって、韋韜を自由気ままにさせていた。二人の兄のどちらかでも健在でいてくれれば、そうした浮世離れた暮らしはいつまでも続けられたのだろうが、人の命運はどうにもならない。叔父は窮屈な儒服をまとって名家の主らしい振る舞いをするようになった。韋荘が合格して立派な官人となれば、叔父はまた本来の気ままな暮らしに戻る。その叔父一人のためにも韋荘は合格しなければならなかった。

叔父のことをそのように思うくらいなら早く帰ればよいのに、叔父に申し

訳ない気持ちがあるだけに、かえって虢州の家は遠くなり、長安を出る気になかなかならず、ふとした気まぐれから遊里で遊んだ。長安にきてから試験を受けるまでの間に、都の名士との交際で宴席に出て、そこで妓女を見ていた。妓館に案内されてひとときを過ごしたこともあった。勉強ばかりしてきた韋荘も、なるほど妓女は美しいものだと感じ、歌や踊りの巧みさに目を引かれもした。それ以上のことはなかった。貢挙のために都に出てきた田舎の若者が、妓女に溺れて一生を棒に振るといふ、よく聞くところの話が、現実のものとは思えなかった。ところが、合格者と落第者との運命が大きく分かれてしまったときに妓館に足を踏み入れてみると、妓女が何ともいえず魅惑的に見え、歌や踊りに心を妖しく揺さぶられた。楊銀が連れてきた手だれの遊び人の手ほどきを受け、すぐに深みへとはまった。妻と肌を合わせなくなっていた韋荘でも、二十七歳とまだ若く、脂粉の香りに誘われるがままに悦楽の奈落へとすぐに落ちていった。この世から己の身が消えるばかりの快感をひたすらに追い、ただその感覚を貪るために遊里に通った。それからの韋

莊は何もかもわからなくなり、楊爺がこれまでと区切りをつけたのが、二ヶ月後の金がなくなる寸前だった。

韋莊はわずかに目を上げる。楊爺が前を歩いている。楊爺はいつも変わらない。背は低く肩幅が広く、後ろからだ、体の輪郭が真四角に見える。長安で楊爺と二人で暮らせたのは良いことだった。昔の日々に戻ったようだった。楊爺には何の気遣いもない。こんな重宝な男は他にはいないと、父がいつも言っていた。韋莊が生まれると、この子を見るのが自分の仕事と心得、楊爺は何でもやるようになった。何か困ったことがあると、必ず助けてくれた。結婚してからは妻のために楊爺は離れていき、外でたまたま会ったときに短く話す程度になっていた。楊爺以外の者では長安に供するのは無理だということ、韋韜が選んでくれた。その楊爺に「もうお帰りのときです」と厳しく言い渡されれば、さすがに重い腰を上げて都を出ない訳にはいかなかった。

都から虢州は東の方角であるから、長安を出るときには普通は春明門しゅ

んめいもん)を選ぶ。韋荘は、このときは遠回りをして南の啓夏門(けいかもん)から出た。通濟坊(つうさいぼう)にある劉得仁(りゅうとくじん)の墓に詣でたのだ。劉得仁は十年ほど前に死んだ男で韋荘との交流はない。詩人として知られ、それ以上に、貢挙について合格しなかったことで有名だった。劉得仁の他の兄弟は揃って合格し、さっさと高位高官に名を連ねたのに、詩文の才では他を凌駕する劉得仁だけが取り残された。貢挙に落ち続け、「病むごとく痴れるごとくに二十年、名を求めて得難くまた休み難し」と、諦められぬ思いを詩に歌った。韋荘は墓の前に立ち、己も同じようになるのではないかとの予感に身震いした。劉得仁はこの詩の後もさらに十年間の不遇に苦しんだあげくに死んだ。「冥冥として春を知るや否や、墳(ほか)の蒿(よもぎ)は日にすでに深し」と、劉得仁に一篇の詩を手向けた。

三本柳を後にした楊爺の背はどんどん小さくなっていく。ほとんど止まりかけていた足を、意識して動かす。楊爺には悩みがないようだ。楊爺が困っているのを見たことがない。己はどうして楊爺のようになれないのか。なま

じ立派な先祖のいた家に生まれたために、文字を学び、貢奉を受けねばならなくなつた。楊爺のような普通の人間に生まれていたら、こんな目には遭わずにすんだだろう。

楊爺はどうして己に尽くしてくれるのか。それが当然と思つて考えもしなかつたが、やはり、貢奉に受かつて立派な官人になる見込みがあると思うから仕えていてくれるのか。楊爺がそのように考えているとは思いたくない。見込みがあるうがなろうが関係ないはずだ。貢奉には受かつてほしいと願つていただろう。落ちたからといって、楊爺の気持ちは少しも変わらなはずだ。

人に仕えるのと、仕えられるのとどちらが良いか。それはわからない。人に仕えられて恥じぬ己であるのは容易なことではない。幸い、楊爺にはその氣遣いはいらぬ。妓女に溺れて腑抜けになつていた姿を、他の者には見せられなくても、楊爺には構わない。楊爺に立派な姿を見せたいと思いつつ、醜態を平気でさらしていられる。

韋莊の足はまた遅くなっている。一生をこの柳の下でぐずぐずしている訳にはいかない。家に帰らねばならない。帰れば当然皆と会わねばならない。三百人の一族郎党の中には、一年ぶりに会いたいと思う人間もいなくはない。顔を思い浮かべるが、妻はその中にはいない。子どもたちはどうか。幼い娘と息子を、都にいる間に、思うようなことはなかった。父としておかしなことかも知れない。どうしてなのかわからない。そんな理由をいま考える余裕はない。叔父に会った際に、何と云うのか、言葉を用意しておく必要がある。

最初の緩い丘を越えると、川が見えてくる。

河原の間の細い流れを跨いで粗末な木の小橋がかかる。そこが韋莊の荘園の始まりだ。橋の先に大きな合歡の木がある。折しも白い花を咲かせる。

前を進む楊爺が、腕を川の彼方へと伸ばし、後ろを振り向き、

「あれは誰でしょうかなあ」

合歡の木の下に一人の男が座す。都に向かったときは、あの橋まで何人かが見送りについてきた。合歡の若い実がだらんと垂れる下で、最後の別れを告げた。合格せずにこの人々の前に戻ってくる訳にはいかないと、そのとき強く思った。

韋莊は目を凝らす。いよいよ韋家の誰かと顔を合わさねばならない。それは誰なのか。ほぼ真上にある夏の陽は、木の葉蔭をとりわけ黒くし、輝く川筋の向こうの人物をことさらに見えにくくしている。

「私の目に間違いがなければ、弟さんか、旦那さまのところのお坊ちやまでしよう」

楊爺は相変わらず目が鋭い。

言われてみると、韋莊にもそんなふうに見えてくる。それなら有難い。

韋莊には莠と藹の二人の弟がある。上の莠は太っている方だから、木蔭の人物とは違っだろう。

楊爺が旦那さまと言うのは叔父の韋韜だ。韋韜には一人息子の蘭(らん)が

いる。蘭を生んで間もなくその母は死んだ。蘭は韋莊より三歳下で、父の韋韜に輪をかけた変人である。

韋莊の二番目の弟の藹は父が死んだ年の生まれで韋莊より六歳下だ。藹と蘭は、性格はまるで違うが、姿恰好がよく似る。それで楊爺は二人のうちのどちらかだと言ったのだ。

あの二人ならどちらでもよい。朴訥な弟と斜に構えた従弟と、どちらでも形式ばった慰めなどは聞かずにすむ。

楊爺は坂を下り、すたすたと橋へと歩いていく。木蔭の人物が立ち上がる。それで弟だとわかる。蘭なら、こちらには気づいても、顔を向うにして座ったままでいるだろう。

弟は木の蔭から出て、楊爺がいくより先に橋を渡り、こちら側にやってくる。楊爺は立ち止まり、

「無事に帰ってまいりました」

深々と頭を下げる。弟は軽く会釈する。何かを言ったようだが、普段から

小さな声であり、短い言葉しか発しない。

すぐに兄の方へと向ける顔に、笑みがあふれる。感情が表に出ない弟にしては、目がきらきらと光っている。

何が嬉しいのか。韋荘は不思議に思う。

弟が間近にくると、己もまた微笑んでいる。

「お帰りなさいませ」

韋荘はまばたきする。一年ぶりに弟を見ただけで、己の気持ちは先程までとまるで違っている。

兄が不合格となり、弟もがっかりしただろうに、この笑顔はどうしてか。兄の帰りを素直に喜んでいいのか。

「ああ、帰ってきた」

ややぶつきらばうな兄の言葉にも、弟は笑顔で何度もうなずく。それを見て、韋荘は帰ってきたのも悪いことだけではなさそうだと思う。

「あそこで私の帰りを待っていてくれたのかい」

「ええ」

「いつもあんなふうにしていたのかい」

「いえ」

「今日だけなのか」

「ええ」

「なぜだい」

「今日はきつ々と思ひまして」

「どうしてそう思ったのかい」

弟は考え込む。

「よくわかりません」

困った顔を兄に向ける。弟はいつもこんな感じだ。話すことが苦手なのだ。

「今日は何かあったのかい」

「いえ」

「わからん話だ」

「蘭兄（らんにい）さんも、今日だろうつて言っていました」

「あれがかい。で、蘭くんは一緒ではないのかい」

「ええ」

弟の話は断片的で要領を得ない。もしもここにいるのが蘭の方だったら、韋荘には話す間を与えないくらいにしゃべりまくるだろう。

理由はともあれ弟が迎えにきてくれて、韋荘の気持ちは少しばかり楽になったようだ。家にもどうやら帰れそうだ。

そう思つて弟と連れ立って歩こうとすると、まだまだ足の方は重い。立ち止まったまま動きたがらない。

弟がぼそつと言う。

「変なことを言っていました」

「誰がだい」

「気の利いた祝いの言葉を用意したいが、あいにくと暇がないつて」

「それは誰の話かい」

「蘭兄さんです。そのくせ、榻（とこ）に横になったままでした」

弟はわずかに笑う。韋荘には何がおかしいのかわからない。

「祝いの言葉とは私に対してかい」

「ええ」

「蘭くんは何を祝うのだろう」

「ごろっと向こうに寝返って、詩をぶつぶつ唱えていました」

「どんな詩だ」

弟は詩を朗誦する。これは弟の得意とするところだ。口下手でも、書物を
読ませればほればれするくらいの良い声だ。

公暇及私身　私にも公けの休みが下されて

何能独間歩　一人ゆったりと歩めることである。

韋荘は笑う。これでようやく蘭が何を考えているのか見えてきた。先祖の
韋応物の詩だ。長安で役人をしていたときの作で、休暇を得て夏の一日を閑
雅に過すごしたことを歌っている。

「なるほど。蘭くんはこう言ったのだろう。『兄貴は期限なしの長い長い公暇をお上から頂戴して都から帰ってきたのですからな、大いに祝ってやりますか』と」

韋莊は蘭の口調を真似る。

「兄上は聞いておられたのですか」

「蘭くんならいかにも言いそうだ。『貢奉なんかにつかり合格でもしたら、お役人さまになってしまつて、休める日などわずかでもあればましな方。それが、大手を振つて、いくらでも休んで良いと言われたのですから、これほどありがたいことありませんな』と、蘭くんは笑っていたのだろう」

「そうは言っていないませんでした」

弟な真面目な顔で否定する。

それは、思いも寄らないことに、韋莊を突如不機嫌にさせる。

「で、おまえはどうしてここにきたんだい。蘭くんの代わりに良い祝いの言葉を思いついたからなのか。それとも、世間並みの慰めを言うつもりかい」

そう口にしてしまつて、己の言葉を嫌い、横を向く。

弟の顔から笑みが消える。口下手の弟は、もちろんこの場を修復する手立てを持っていない。

弟を見て嬉しく感じたのはついいまのことだ。しかし、弟と己の間には大きな距離がある。それはどうしても超えられない。

韋荘は打ち萎れる。弟には何一つ非がない。弟を責めて何になる。

韋荘は顔をしかめたまま、ぐいと歩き出す。どうせ家にはいかねばならぬのだ。この不愉快極まりない顔でいけばいい。

楊爺が怪訝そうに見ている。韋荘はそれに気づく。

構うものか。足音高く進んで橋にさしかかる。

弟が駆けてくる。

「私は慰めなんて申しません」

後ろで叫ぶように言う。

韋荘は振り返る。

先ほどと違って、弟の悲しげな顔がある。弟はもともと喜怒哀楽の情がないのかと疑われるくらいに、表情の変化の少ない男だ。それが、今日はずかの間、喜んだり悲しんだりしている。それは全てこの兄の故だ。

「すまん」

韋荘の心が元に戻る。

弟は頭を下げる兄を不思議そうな目で見て、

「兄上が不合格であったと聞き、私はひどく腹を立てました。そんなことをして一番困るのはお上御自身だからです」

弟は唐突に言う。

「私はそのような人間ではない」

弟が何を言おうとしているのかわかる。兄は単に一族のためではなく、お上と唐土の民のために合格すると信じていたと言いたいのだ。

「落とした連中が悪いのです」

韋荘は唇を噛む。不器用な弟が懸命に言っているのだ、怒ることではない。

韋莊は笑みを無理に作る。何をどう言おうと己は恥ずべき落第者として帰ってきた。だがこの弟に理不尽な怒りをぶつけてはいけない。

「私は世間にいくらでもいる不合格者の一人になっただけだ。腹を立てることでも、悔しがることでもない。千人受けて九百九十人以上が落ちる。受かる方が珍しいのだ。世間にざらにいる不合格者の仲間入りをしたくらいで、いちいち泣いたり怒ったりしていられない。蘭くんの言うように祝うのも一興かも知れないが、それとて無用だ。ごく詰まらない平凡な出来事なのだ。だから、ちよいと出かけて、そこらを散策してきたのと同じように、ごく当たり前前の顔で、この橋を渡って帰っていけばいいだけのことだ」

韋莊は高らかに笑う。とってつけた笑いだと自分でも思う。しかし、弟の前ではこうするよりない。

韋莊は大股で歩む。

鷺が川べりより飛び立ち、蟬が高らかに鳴き出す。夏の平凡な風景であり、世間にいくらでもいる不合格者はこのようにして郷里へと帰っていくのだ。

だから、敢えて弟と楊爺を従えて足幅広くずんずん進むのであるが、橋を渡り終わり、合歓の木の下をくぐり、桑畑の丘を上って、道が下りへと転じる角で、莊園の中央部に並ぶ一族の家並みの一部が見えてくると、その勢いは萎え、そこから足がまた前に進み難くなる。あそこに住まう人々の命運は他ならぬ己の両肩に載っているのだった。合格してここに帰ってこなければならなかったのだ。

あそこに見える家々の内の一軒に己は住まい、合格を期待する人たちに囲まれて、勉強を続けてきた。そのころには常のこととして意識していなかったのだが、再び同じ場に戻ろうとして、己はあそこでも強い緊張にさらされていたのだという事実を知る。莊園の人々はなぜかいつも不快そうな顔をしている。莊園の暮らしに喜びを見出している者はほとんどいない。家運が傾けばどこもそうなるものなのだろう。もしかしたら大きな変化が起こるかも知れないということに細い希望をつないでいる。それはもちろん、韋莊の合格によってもたらされるのだ。

同じ元の状況に己を置きたくない。あの生活に戻りたくない。貢挙に合格しなければとの切迫感に迫われ、合格を期待する人々の視線にいつもさらされ、苦学する日々に戻るなど御免だ。しかも、今度は、不合格になった事実とも直面し続けなければならない。

足が竦む。それでも立ち止まればしない。楊爺と弟が後ろにいる。二人の前で、さつき大声で笑ったばかりではないか。ここで無様な姿は見せられない。

無理に下っていくと、桑の間から独特の匂いが漏れてくる。繭を煮ているのだ。これは虢州の我が家の夏の匂いだ。ここに移ってきて最初はこの匂いが苦手だった。死んだ叔父が利を得るために養蚕に熱心で、それでこの莊園には広い桑畑がある。今ではこの匂いに慣れて、かえって懐かしい気さえする。

桑畑が終わると、小さな流れに行き当たる。狐潭（こたん）と呼び習わされている池から出てくる小川だ。狐潭は韋莊の先祖がここを手に入れる前から

あつた溜め池で、どんな日照りにも涸れたことがない。ここで右にいつて狐潭に逃げ込んでしまいたい。そこには楊爺の小屋がある。水を管理しながら楊爺はふだんはそこで一人で暮らしている。あそこなら村人はたまにしかこない。

そうはいかないから、左へ小川の流れる方向へと進む。林と畑の向こう、家並みはもう間近だ。水路にしゃがんで数人の女たちが黙々と洗いものをしてる。足音に気づき、顔を向け、韋荘だとわかると立ち上がり、深々と頭を下げる。やはり、いつものように女たちはどれも詰まらなそうな表情だ。それはそうなのだろう。このままでは一つも良いことなどないに違いないからだ。

韋荘は女たちをそれ以上は見ることなしに脇を通り抜け、水路をまたぐ石の橋を渡る。ここからが一族の家並みである。人々が寄り集まって住むところには独特の匂いがある。これが己の住まうところの匂いだ。韋荘は顔をしかめる。

ここでどの家に向かうか、一瞬だけ迷う。死んだ父親の代わりに一族の長となつてくれている叔父の屋敷にいく以外にはない。それでも別のところへいけぬものかと思つてしまう。我が家はためだ。あの家は最も戻りたくない。ここで韋荘ははつきりとそれを知る。ならばどこがよいのか。二人の弟の家だ。

元々は韋荘兄弟も叔父と一つの屋敷に住んでいた。韋荘の妻が次々にもめごとを起こし、韋荘が屋敷を出た折に、莠と藹の二人の弟も、古びた一軒の家を修理して移った。石橋から右に二軒目がその弟たちの住まいである。すぐそこに入り込みたいが、ここまできて、いちばん奥の屋敷で叔父に会わないというのはあり得ない。

韋荘はしかめた顔をさらに歪め道の左右を眺めやる。何というみすばらしい家並みだ。ここに住んでいたときは見慣れていたからなのだろう、そのように思わなかったのだが、都の壮麗な屋敷の間を日々に歩いてきた目には、恐ろしく貧相な檻樓小屋の並びとしか見えない。黒くくすんで、継ぎはぎだ

らけで、しかもあちこちが壊れたまま、こんなものが都にあれば、人から見捨てられた廃屋と思われるだろう。ここに三百人だかの連中が暮らしている。それが先ほどから漂うこの臭気だ。夏の午後の太陽に蒸されてことさらにきつい。これはここの連中の放つ匂いだ。まさしく韋一族の匂いだ。この匂いのしみついた連中がここにいる。

これが我が韋一族の姿だ。どうしてこんなに暗く淀んでいるのだ。ここがこの莊園の者にとつての天下に唯一の拠り所、こここそが都だ。本物の都はどうだ。落第者には必ずしも心の慰めにはならなかったが、牡丹の咲き乱れる都の晩春はすばらしいものだった。着飾った人々が都の内外の名所を遊び歩く姿は、唐の繁栄をまさしく象徴するものだった。

何という違いだ。我が韋一族が三代にわたって朝廷から見放された結果がこれだ。都の栄華の片鱗でも我が莊園にもたらすには、唐の官人にならなければならぬ。唐の富は皇帝の威光によつて都に集められ、皇帝の周囲にいる人々に配られる。その恩恵に浴する者たちは百花乱れる都の春を満喫し、

恩恵の片鱗さえも頂戴できぬ者はこの饅えた匂いの中で息を詰まらせるしかない。

韋荘は歩く。人々は韋荘に気づき、手を止め、口をつぐみ、道に立って頭を下げる。左右に十軒ばかりの家の並びも、ひどく長く感じられる。人々は何を考えているのか。そんなことはわかつていない。韋家の御曹司がとぼとぼと歩いて帰ってきたのだ。夢が打ち砕かれた現実と、皆は渋々向き合っているのだ。都の富のひとつかけらを手に、晴れやかな春風とともに颯爽とここに帰ってくるべき御曹司が、何も持たず暗い顔で、暑い夏の日差しの下、汗と埃にまみれて重い足取りで皆の前を進んでいる。これまでの苦しくなる一方であった荘園の暮らしがこれからも続く。もしかしてと期待を抱いた分だけ落胆は大きい。

やっと家並みを抜けようというところ、韋荘の目の前に鶏が飛び出してくる。翼を広げ叫んでいる。腕で打って追い払う。何かに驚いたのか、あるいは久しぶりに見た韋荘に驚いたのか。そうではあるまい。韋荘に怒ったのだ

ろう。人々と同じように、この情けない御曹司を殴りつけてやりたいと思つたに違いない。

右は樹叢で、左は厩舎で区切られた広場となる。厩舎の前で、牛が石臼のまわりを巡つて粉を挽いている。ここでも人々は仕事を中断して、韋荘に頭を下げる。長安に向かうときに、皆の見送りを受けたのがここであつた。あのときは希望があつた。

広場の奥に石段がある。その上に門が建つ。韋一族の格式を示す大門であるが、都の高位高官、大富豪の邸宅と比べたら見る影もない。これが叔父の屋敷だ。門の下で身なりを整える。いくら直しても、いつもの馴染んだらしのない形にすぐに崩れてしまう。

楊爺が先に石段を上る。門の内側は何ら飾り気はないが綺麗に掃除が行き届いている。叔父の好みで、目を奪うような色のある花は植えていない。小さな亭の脇を通り、中堂の前に立つ。韋荘の帰還を知つた下男が会釈し、中に取り次ぎに入る。しばらく待つ。弟が脇に立っているが、互いに何も言わ

ない。韋莊はこれからの己の振る舞いを考える。

中堂の奥の部屋に通される。ここには先祖の位牌が並ぶ。正装をした叔父が中央に立っている。一族としてここは大事な場面であると叔父も考えているのだろう。

韋莊は叔父の姿を認めるとすぐに小走りになって進み、ぱったりと床に膝をつき叔父を拝する。

しばし時を置いて、用意しておいた言葉を並べる。不首尾に終わったのを詫びる。叔父は無言のまま受け止める。叔父が少し身を脇に寄せ、韋莊は膝をついたまま前に進み、床に頭を擦りつけつつ父祖に詫びる。これでやるべきと考えていたひと通りのことが終わる。落第者が何をすべきかなど教えられたことはない。およそこのようなことだろうと、韋莊は身を起こす。

叔父は窓際に置かれた椅子に腰掛け、韋莊にも向かいに座るよう示す。韋莊は立ち、促されるままに進む。椅子には斜めに尻を半分だけ載せて座る。卓の上に茶が運ばれてくる。叔父は無言のままひと口すすり、甥にも勧める。

韋莊は頭を下げるばかりで茶碗を取らない。

叔父はさらにひと口すすり、軽く咳払いしてから、ゆったりと立ち上がる。韋莊は前のめりになった姿勢から首を上げ、叔父の足元から見上げていく。先祖から伝わる立派な服だ。叔父は長身で痩せているのであまり似合わない。細くすらりと長い指が袖から出て、白いものがまじった顎鬚の上にこれまた細い顔があり、そこに穏やかな眼差しがある。官に仕えるべき人でなく、俗塵にまみれてよい人でない。この叔父を本来の悠々自適の暮らしに戻すためにも己が合格してここに帰ってこなければならなかった。

韋莊は床に目を落とす。

叔父は静かに口を開く。

少事武皇帝 若いころには武皇帝に仕え

無頼侍恩私 その恩顧をたのんでの無頼漢。

叔父は事あるごとに詩を朗唱する。必ず先祖の韋応物の詩だ。

いま叔父が唱え出したのは韋応物が己の半生について歌ったものだ。武皇

帝とは玄宗皇帝である。韋応物の青春は玄宗皇帝の全盛期に当たった。すなわち唐の絶頂期である。都の裕福な家に生まれた韋応物は、皇帝を警護する兵士となり、煌びやかな服をまとい、この世に怖いものなど何もないとばかりに都大路を闊歩し、放縦な日々を送っていた。

一字都不識 字など一つも知らなくて

飲酒肆頑癡 酒を食らって愚かさ気まま。

学問など無用で、この華やかな都で一生涯遊び暮らしていけると思っていた。大唐の繁栄に少しの陰りもなく、己の若さとともに永久に続くかのように韋応物は思っていた。しかし、突如として安祿山（あんろくざん）の大乱が勃発した。賊軍が瞬く間に都に迫り、玄宗皇帝は成都へと逃がれた。唐は存亡の危機に墜ち、韋応物も生死の瀬戸際に立たされ、己の人生を見直し、初めて書物を開いた。

読書事已晩 書物を読むには遅すぎたが

把筆学題詩 筆を手にして詩を書く勉強だ。

今さら遅くとも、しかし、今から始める以外にないと、正道に立ち返れば、もともと無道だった人間ほど強く、韋応物の勉学はみるみる進み、唐の再興とともに立派な官人になって、大詩人としての名をも残した。

韋家の人間に生まれてこの詩を知らぬ者はまずいない。韋荘も母からこの詩を教えられ、己の祖先がいかなる時代をいかに生きたのかを知った。韋一族にとつて旧き良き日々として語り継がれてきたのであるが、それは何もせずを得られたのではなく、当時の厳しさを乗り越えた人物がいたからこそ獲得できたものだった。

この詩を吟じる叔父の気持ちに韋荘はすぐに理解する。叔父も韋荘も韋応物の血を引く。韋応物の跡を踏もうとするのは韋一族の人間であれば持たねばならぬ志である。才と運に恵まれずに果たせぬ者もいれば、最初から諦めて努力を惜しむ者もいる。韋荘は十分な才を持って生まれ、父や母、そして叔父たちに見守られつつ努力をしてきた。今回は運に恵まれなかったが、韋応物が勉学に志したのが遅かったことを思えば、韋荘はまだまだ若く、将来

を悲観するのは早すぎる。

叔父は韋応物の詩を何よりも重んじ、この詩を示せば甥は必ずわかると信じている。叔父の気持ちは良くわかる。一度の失敗くらいは笑い飛ばす強さを持たねばならない。韋荘自身も弟の前でさつき笑ったばかりではないか。しかし、先祖の詩は励ましとはならず、気持ちを押しつぶす重しとなる。いまのところは、叔父と父祖に詫びるといふ体裁をかるうじて取り繕うことができている。これで精一杯だ。

韋応物は偉大だ。その子孫である己は一部分であっても受け継いでいるはずと思うのは、いささか心の支えにはなるとしても、所詮、韋応物は韋応物であり己は己である。韋応物の一部しか持っていない己に韋応物のようになれと言われるのは辛い。若いときの無頼が韋応物を強靱にした。己は幼いきから勉強しか知らないひ弱な人間だ。己自身がその弱さを一番良く知っている。楊翁がいなければ都の暮らしはできなかつたし、ただの一度の失敗で挫けて立ち直れないようにもなってしまう。弟の前で高らかに笑ったのは単

なる強がり、叔父に詫びるのはこの場しのぎである。落第はこの一度でたくさんだ。劉得仁のように三十年も落第を続けて死に至るなど、いったい何のための一生なのか。

叔父が詩の朗誦を終えると、韋荘は立ち上がり、

「父祖の名を汚さぬよう、今日より、また勉強に努めます」

喉の奥に貼りついたような声だ。

韋荘は体良く振る舞う知恵に長けている。貢挙の合格者に課せられる銓試にこそ絶対の自信があったのもそれだ。韋荘は再び先祖の位牌の前に行き、優美な仕草で拝すると、何やら念じるようにしばらく床に深く伏したままになる。

叔父はその様子に何度もうなずき、韋荘が身を起こすのを待って腰をおろし、甥を前に座らせ、茶を入れ替えさせるとともに菓子を持ってこさせる。

揚げ餅に胡麻を振った子供のころからの好物である。叔父に促されてひとつ手にする。口が乾ききっていて、せつかくの菓子の味がわからない。茶を

含んで流し込む。韋家としては上等な茶であるが、妓館で出されたものの方がよほど香りが良い。

叔父はすっかり穏やかな顔になっている。叔父もかつては都に住んでいたので、近頃の様子を尋ねる。叔父に関心がありそうな仏寺や道観の名を韋荘はそつなく持ち出し、都の繁盛のさま、皇帝の徳の高さを語る。

叔父を満足させ、韋荘はほっとして部屋を出ようとすする際、

「二三日したら、また釣りでもするか。ちやうどあれも珍しくいる」

叔父が言う「あれ」とは息子の韋蘭のことだろう。

「いずれそうさせていただきます」

この場はこれで終わるが、號州での日常がこれから始まるのかと思うと、すぐに憂鬱になる。「二三日したら」と言う「二三日」がひどく長いもののように思える。妓館に通った日々は昨日も今日も分からぬ短いものであったのだが。

叔父の前から下がり、中堂から外に一步踏み出すと、いま叔父の口の上っ

「たばかりの従弟の韋蘭が壁にもたれて立っている。葛布の頭巾を頭から取って、胸元にぱたぱたと風を送っている。相変わらぬの気楽さだ。」

「叱られましたかな」

蘭は横を向いたまま声をかけてくる。

「いや、叔父上は優しい人だ」

堂中であつたことを話す。

「親父殿は、まあそんなところでしようかな。ですが、兄貴としては、こつびどく叱られた方が良かったのではありませんかな」

蘭は年上の従兄を「兄貴」と呼ぶ。

「このごまだ。それがふさわしいだろう」

韋莊は己の身を指さす。

「なかなか佳い姿ではありませんかな。薄く化粧でもしたら、すぐ遊里にいかせましょう。ここらにないのが玉に瑕ですが」

「何を言うか」

蘭は葛巾をぽんと頭にのせ、手を懐につっこみ、取り出して、韋荘の胸元にほうり投げる。小さな布切れだ。広げると鸚鵡の刺繍を施した絹の手巾である。

「大事なものではありませんかな」

蘭は父親に似た細長い顔を向けてくる。目は柔和な叔父と違って鋭く切れ上がっている。

「これがかい」

鼻に当てると、あの妓女と同じ香りがするような気がする。

「少々雑な刺繍ですな。俺ならもう少しましな職人を見つけて刺繍させますな。手近な老婆か小女にわずかな錢でやらせたのでしょうか。そんなものを有難がる鼻の下の長い御仁も、どこかにはおるのでしょ。田舎の荘園からぼつと出てきた受験生にありがちなことです。それでも、延興門外の酒肆（しゅし）でしこたま酔って、おぼつかない足で、一時の気まぐれで乞食に与えたところを見れば、さほど惜しくもない品であったのでしょな」

韋莊はうろたえる。見れば確かにこの手巾だ。

あの女とつまらぬ諍いをして夜中に妓館を飛び出し、道で夜が明けるのを待って、無性にむしゃくしゃしていた。ふらふらと延興門の近くで酒旗に誘われて店に入り、浴びるほど飲んだまでは覚えている。

「そなた長安におったのか」

「さあ、どうですか」

蘭は妙な男だ。ひゅうと口を鳴らし、

「真面目にここで粉を挽いても牛は不味い草が食えるだけ。延興門で座っていれば、乞食でもそんないい匂いのするものがいただけますから」

蘭はまた頭巾でばたばたとあおぎ出す。

楊爺は韋蘭を「お坊ちやま」と呼んだが、莊園の者たちは普通は「雀蛤（じやくこ）先生」と呼んでいる。韋蘭の居室の入り口に一枚の板が吊るさされている。表に蛤、裏に黄色い雀が描かれる。淮水（おうすい）の底に棲む蛤は春の潮が上がってくるのを感じると黄雀（こうじゃく）に変じて空に昇る。黄雀は西の

空より秋の気が下ってくるのを感じると蛤に変じて水に潜る。そうして五百年を経ると仙化して蜃蛤（しんこ）となる。韋蘭は虢州にいる間は板を表にしておくが、裏返して黄雀の絵を出すと、ふっと姿を消してしまう。短くて十日、長いと半年から一年も帰ってこない。ある日、また板が表に戻って部屋で寝転んでいる。どこで何をしていたのかと尋ねると、韃鞬（だたん）で鴻（おとり）にまたがって空を飛んだのだの、新羅（しんら）で熊（ひぐま）と一緒に踊ってきたのだの、琉球で鯨を釣り上げたただの途方もないことを話す。実際のところは、西は長安、東は泰山、南は漢水のあたりまでいって、文人や道士はおろか、漁師や商人、ときには盗賊とも交わるのである。帰ってくるとき、立派な儒者のなりをしていることもあれば、年老いた術師の姿をしていることも、珍妙な胡人の風体をしていることもある。どこでどう寝泊りし、路銀を工面しているのか謎である。ある年には医术を仕入れてきた。さっそくその技で莊園の者を救い、「先生」と幾分か敬われるようになった。父親の韋鞬が、一人息子を気ままにさせているのは、己自身がそのようになってみたいから

であるのだろう。

「落第した惨めな男の姿を見物してやろうと思つて都にいったのかい」

韋荘はやや毒気を含んだ言い方をする。蘭は、

「どうしてどうして、惨めどころか、兄貴ときたら、ようやくまともになつたと、俺には見えませんでしたな。人間、ああでなくてははいけませんな」

と、愉快そうに言う。

「何とでも好きなように言つてくれ」

韋荘は懸命に思い出そうとするが、手巾を韋蘭らしき男にやった記憶はない。

「しかし、やつぱり兄貴だ。こうしてちゃんと帰つてこられたのですからな。

俺なら、天竺（てんじく）か倭国（わかこ）にでもいきますな。こんな狭苦しい唐土で我慢していても仕方ないでしょう」

「我慢している訳ではないし、帰る所はここしかない」

「他所にいったところで、真実大切なものは見つからない。結局は己の内に

ありと言うところですか」

「そういう話ではない」

「まあ、あの楊爺が付いていては、どこにもいけませんでしょうしな」

「そなた、本当に都にいたのなら、声くらいかけてくれればよかつたのに」

「それは兄貴にとつて迷惑だったでしょうな。臭い乞食を連れては遊里には
いけませんからな」

蘭は笑い、韋莊は苦い顔だ。

「まあよい。こんなもの返してもらつても仕方がない」

韋莊は手巾を投げる。蘭は手に受け、韋莊の鼻先に突きつけ、

「こんな香りをぶんぶんさせては家には帰れませんでしょうからな、俺が預
かっておきましょう」

「嫌なことを言うな」

「嫌なことは早くにすませるに限りますな」

「我が家に帰るのが、嫌なことではどうにもならない」

韋莊はまた顔をしかめる。

「さつさと終わらせて、その後ですな、本当の始まりは」

「何の始まりだ」

「さあ、わかりません」

「何だ妙なことばかりを言って、さっぱりわからん」

蘭がわからないのは今日に限ったことではない。

「そのうち俺とよろしくやりましょう。とりあえず、目の前の嫌なことですな。俺は莠くんの家で待っております」

韋蘭は頭巾を頭に載せると消える。

楊爺がどこからともなく姿を現す。蘭の言った通りだ、楊爺がいては他所にはいけず、正しくするしかない。

「藹はどうしたのか」

「先に帰っていますと、おっしゃっていかれました」

「先にと、あれが言ったのか」

韋莊は念を押す。

「左様にございます」

藹も蘭も同じだ。ここでの帰り着く先は弟たちのところだとわかっているのだ。我が家は落第した己を置ける場所ではない。しかし、叔父の家がすめば、順番として次は我が家である。仕方ないことだ。

大門より石段を下る。広場にも向こうにもあちこちに人が立つ。昼間の最も長い季節のいまでも、人のつくる影が長くなり出している。その間に、一族の者は韋莊の帰還を知っただろう。その三百人だかの視線にこれからここで耐えていかなければならない。わずかに幸いなのは、韋莊の家は広場を通り抜けずに、脇の樹叢の間の小道をたどった先にあることだ。

木々の中に身を入れて少しほっとする。しかし、それは一瞬だけ、すぐ後には妻のあの視線にこの身をさらさなければならぬ。韋莊の足はぐつと重くなる。

どうにか我が家の前にまでくると、楊爺はその脇で待っていて、

「無事にお坊ちやまをここまで御案内いたしましたので、この爺めの役目はこれにて完了いたしました。長い間、御無礼いたしました」

楊爺は頭を下げる。韋荘も姿勢を改め、

「そなたのお蔭で何の不自由をすることもなかった。礼を言う」

「もつたいないことです。この爺にできるのはこれくらいしかありません」
楊爺はわずかに微笑む。

「ゆっくり休むが良い。都では気苦労も多かつたらう」

「何でもありません。この爺が休むのは死ぬときです。これからすぐに池のあたりを見回って、一年もほったらかしますから、あちこち直さねばならないと思っています。若い連中は何もしませんから」

「楊爺がいないとこの莊園は何もかも駄目だ」

「この爺など何ひとつしておりません」

楊爺は頭を下げて去っていく。

楊爺は良く働く。休んだのを見たことがないし、くよくよと心配している

のも見たことがない。いつも黙々とやるべきことをこなし、自信に満ちているように見える。楊爺のように己も生まれていればよかった。どこへいっても立派に一人で生きられるだろう。

そんな楊爺が、どうして己のためにいつも尽くしてくれるのか。ひ弱でもも放っておけないからなのか。父や母に託されたからなのか。楊爺は何も言わないがたぶんそんなところだろう。

「楊爺」

韋莊は背中に呼びかける。

「次にいくときにはまた頼むぞ」

「かしこまりました。是非お供させていただきます」

楊爺は嬉しそうに笑う。

次に貢奉を受けることがあるとは韋莊は思っていない。もうこりこりだ。

しかし、楊爺に向かってはこう言っておきたい。

楊爺は、門からは入れない。妻に毛嫌いされているからだ。

うなだれて門をくぐると、子どもたちの乳母が出迎える。

「奥さまがお待ちでございます」

にこりともせずと言う。乳母は三十近いが、年下の妻に媚びて、韋荘にはこの上なく無愛想だ。そうしていないと、家では居づらいのだろう。子どもたちにどういふ接し方をしているのか韋荘はほとんど知らない。韋荘が子どもたちの様子を滅多に見ないからだ。

いま一度覚悟を決めて家に入る。叔父の屋敷と違って、数部屋の狭い建物だ。韋荘はすぐに妻の顔と向かい合せになってしまふ。

妻は部屋の中央で仁王立ちだ。脇に小間使いの老女がいる。妻が元の家から連れてきた女だ。韋荘は妻の眼は決して見ないようと、視線を床に落としつつ進んでいく。妻の足が目に入る。かかとを少し持ち上げ、小刻みにからだを揺すっている。不機嫌なときはいつもこうだ。

一年ぶりに帰ってきたのだ、夫として言うべきことがあるに違いない。しかし、叔父に会う前と違って何も用意していない。忘れた訳ではない。妻の

前に立つ己の姿を想像したくなくて、敢えて準備するのを放棄していたのだ。ともかく、まずは詫びるべきだろう。何を詫びるのか。落第したことだ。しかし、受験は妻のためにしたのではない。なぜ妻に謝るのか。ならば、帰るのが遅くなったのを詫びるのか。遊里でいつまでも遊んでいたと頭を下げるのか。ばかな。

韋荘の逡巡は長くは続かない。妻が先に口を開く。

「よくもまあ帰ってこられたことです」

高い声が部屋に響く。これでもまだかなり抑えている方だと韋荘は思う。

小間使いが揉み手をしている。女主人によって家の主がさんざんな目に遭わされるのを楽しみに行っているようだ。

「よもや、こんなひどいことになるとは思いませんでした。何というこ
とでしょう」

妻はかかとを下ろす。いよいよ始まりだ。

韋荘は何も言わずに立っていようと決める。

「だって、この私がですよ。何ということなのでしょう。こんなひどい目に遭わされるなんて、誰が思ったでしょう。まったくいったい何てことでしよう」

いつもの口調で、同じことを何度も言う。

「さんざん詫びてまわったのでございます。この私ですよ。叔父さまから始まって、順に順に、どの家もどの家もです。叔母さまですよ。いいですか、あの何時だって冷たい憎々しい顔が、それはそれはもう一段とものすごいことになっていて、その前で、頭を下げたのですよ。誰がつて、この私ですよ。あれに耐えるだけでも私がどれほど大変だったのか。ほんと、何て言うことなのでしょう。それからあっちにもいき、こっちにもいき、頭ばかり下げて、どうして、どうして、この私がこんな目に遭わないとまらないのですか。どうしてなんです。まったくいったい何ていうことなのでしょう」

妻は苛々をぶつけるように言葉を吐き出す。

この声を聞けば確かに我が家に帰ってきたというものだ。これがこの家の

日常だ。

妻が「冷たい憎々しげな顔」と言うのは、死んだ叔父の妻、薛未亡人のことだ。妻は誰ともうまくいっていないが、とりわけ薛未亡人とは具合が悪い。その薛未亡人に頭を下げたのが本当なら、相当に嫌な思いをしたことだろう。韋荘は同情はしないが、くどくど言うのも妻としては仕方ないのだろうと理解はする。

とすれば、相当に長くなるなと覚悟すると、妻は薛未亡人から始まって一族の者たちの悪口を順に言い募る。とりあえず矛先が己からは遠ざかった訳だ。妻はここに嫁にきてからずっと苦労し続けであるどぐだぐだと言ひ、身も心もずたずたで、からだのあちこちが悪くなったもの、みんなこの人々のせいであると、次から次へととめどなく、ついには泣き始める。

韋荘は黙って立っている。大方このようになるのだ。

妻は涙を拭い、恨めしそうに顔を上げたところで、うっかりと韋荘は妻と眼を合わせてしまう。

一瞬だけ妻を美しいと感じる。嫁入りの日にそう思ったように、妻は美人で、あの妓館の女より数等上だろう。

妻はきつい眼を夫に向け、

「あなたがこれほどの無能男だったとは、悔しいことに、私は何も知りませんでした」

と、夫を罵り出すと、そんな思いはすぐに消し飛ぶ。

妻はいつもの通りのことを並べる。妻の実家は韋莊ほどではないにしてもそれなりに立派な家柄である。何代かにわたって官人を出し、教育も行き届いて、妻はきちんと育てられ、父や母ばかりでなく大人からただ褒められて成長し、立派な人の妻になるに違いないと一族の者に羨ましがられ、天下に聞こえる韋家に、将来まことに有望な才人がいるというので、韋莊のところに来たのだった。ところがきてみたら、現実はまるで違っていたと、夫をこきおろす。

夫を侮蔑する言葉を十分に並べ終わると、また薛未亡人たちを悪口の対象

にする。

「いったいあの人たちは何なのですか。ただ何もしないで、幸運が転がりこんでくるのを待っているだけではありませんか。あなたが受ければ、一族は繁栄し、そうなったらこうしようと、取らぬ狸の皮算用をしているだけではありませんか。それが思い通りにならなかったからって、どうして私が謝りにいかなければならないのです。どうしてなのです。落ちたのはこの私ではありません。果報は寝て待てというあんな親類連中の御機嫌を必死に取り結ぶなんて馬鹿馬鹿しくてやっていられません。そうでしょう。ですけど、あなたの顔をつぶしてはまずいと思いますから、必死にこらえて、ぺこぺこ頭を下げて、嫌な思いをたくさんたくさん我慢したのです。何ていうことでしょう。どうしてどうしてこんな苦勞をするために私はここにこなければならなかったのですか。父や母は私をこんな目に遭わせようとして育ててくれたのではないはずです。まったくいったい何てことなのでしょう」

韋荘はできることなら耳を塞いでいたのだが、「果報は寝て待てというあ

んな親類連中」というくぐりは良く聞こえた。その通りだ。一族全部が一人の男が試験に合格するのをただただ待っているのだ。さんさん苦勞するのは韋莊一人で、皆は寝て待つだけだ。

「寄つてたかつてこの私をさんさんな目に遭わせるあんな連中は、見返してやれば良いのです。本当ならあなたが一族の長のはずです。それなのに、財産は変てこな叔父さんに握られ、意地悪な叔母さんが人を苛め、私は耐えてばかりいる。あなたには何もできないのですか。この私がこんな惨めな目に遭わされていると言うのにですよ。あなたはどれほど無能なのですか。私の夫なのでしよう。もう我慢がなりません。いったい都で何をなさっていたのです。試験に落ちただけでなくて、他のことは何もできない無能者のくせして、綺麗に化粧した女を抱くのなら得意なのですか。まったくいったい何てことなのでしょう。どうしてこの私がこんな侮辱ばかりを受けないとならないのですか」

とうとうその話になった。確かに非は己にある。だが、こんな言い方をさ

れば妻を一喝したくなるものだ。むろんできないから黙っている。

「あなたが都で、人に言えないようなおいしいことをしている間に、この私は、いいですか、ここで謝ってばかりだったのですよ。まったくいったい何てことなのでしょう、この私がこんな目に遭っている間に、あなたときたら。

どうせ私など、ずっとずっとこんなことばかりが続いて、年取っていくしかないのです。そんなふうに一生涯を絶望のうちに終える女として生まれてきたのでしょうか。私は全然違う一生を思い描いていたのに、今日はもうよくよくわかりました。あなたの顔を見たら、惨めに死ぬしかないと納得するよりありませんもの」

ここで妻は甲高く叫ぶと、わあわあ泣き出す。

これではどうにもならない。頭を下げて謝るしかない。もごもごと、詫びだか言い訳だかを、自分にも聞こえないくらいの低い声で、しかし、哀願する口調だけは伝わるように、ひたすら頭を下げて言い、そのまま後ずさりしてこの場を離れる機会を窺う。

突然、妻は夫の衿を掴んで引き寄せ、目を吊り上げ、鼻をひくつかせる。「落第生の癖して、さぞかしい思いをなさつてきたのでございましょう」
韋荘は身を竦める。

「私なんか、ここにくる前に死んでしまえばよかったです。父と母を悲しませはしたでしょうが、こんな惨めな境遇に陥らずにすんだのですから」
妻は同じ事を並べ直し、またわあわあと泣く。韋荘はうなだれて立っているしかない。

小間使いの老女は相変わらず揉み手をしている。腹立たしい女だ。ふっと脇に目をやると、隣の部屋の隅に娘と息子が小さくうずくまっている。妻がこれまで言ったことは、全部子どもたちの耳に入っている。これもいつものことだ。娘の彩霞は眼だけをこちらに向けている。とんでもない父親だと思っっているに違いない。息子の純は壁に頭を押しつけているようだ。

妻はそのうちわめき続けるのにも疲れ、

「良くまあおめおめと帰ってこられたものですこと。こんな顔など、二度と

見ない方がましでした。さっさとあつちについてくださいな」

妻は韋荘の胸を押しやる。

韋荘はようやく解放される。子どもたちのいる部屋の前を通り、一度建物の外に出て、庭に建つ書堂に入る。ここが韋荘の勉強部屋であり、避難所だ。

扉を開けると黴臭さが鼻を突く。中は一年前のままになっている。

ここでもいつも勉強していた。去年ここを出るときには大いに希望を持っていた。二十年以上も続けてきた勉強の成果が試されるのだった。長い労苦が報われずに終わってしまうようなことは絶対にないと思えた。しかし、結果はこの通りだ。

一年前を思い出して胸が潰れそうになる。

机の前に座り、本を手にする。不合格となつてからは見たいとも思わずにいた書物である。もしももう一度受験するのなら、これらを学び直さねばならない。うんざりだ。

ここも安心していられる場所ではない。

ごろりと榻に横たわる。

元に戻ってしまったのか。そうではない。元に戻れたのならまだよい。不合格であったという厳然たる事実が付け加わったのだ。

目を閉じてもう何も考えまいとする。

疲れた。ともかく今日の最も嫌なことは終わった。このままここで眠って、二度と起きずにいられたら、それが一番良いのだろう。

目を開けると、部屋の内は暗くなっている。

眠ったわけではない。こんな気持ちで眠れるはずがない。一人でここにいて、夜をどう耐えたら良いのか。そのうち腹も減ってくるだろう。妻と食べる気にはなれないし、小間使いも乳母も気を利かせてここに運んできたりはしないだろう。

弟の家にいくしかあるまい。韋蘭も韋藹も待っていると saying いた。あい

つらはよくわかってくれている。

韋荘はもうしばらく暗さが増すのを待ってから動き出す。外で誰にも顔を見られたくない。

書堂を出る。ぼんやりと周囲が見える程度の暗さになっている。すぐに蚊が寄ってくる。母屋の方の様子をさぐる。小さな灯りがついているがひっそりとしている。女主人があれだけ激高したのだ、誰もが息を潜めているのだらう。

裏手の林に入る。屋敷から続く樹叢の間を縫うようにして進んでくる黒い人影がある。韋荘は足を止め、木の蔭に身を潜める。華奢なからだつきで、なよなよとした歩き方は、どうやら韋愠だ。死んだ叔父の韋韞のところの三男だ。薛未亡人にいびり出された妾の子だ。

韋荘は舌打ちする。薛未亡人に憎まれているということが共通点で、韋愠の妻は愠を以前から可愛がっている。妻がここにきたばかりのところ、愠はまだ十歳かそこらで、薛未亡人に苛められると、韋愠の妻の膝にいつもすがっ

て泣いていた。

また何かあったのだろう。あれももう十七か八のくせして、いつまでも泣き虫の子どものままだ。

韋荘は首を振り、慍に気づかれぬよう足を忍ばせて弟の家の裏側へとまわる。

三つの音が合わさって聞こえてくる。一つは笛。これは韋蘭だ。蘭は何でもできる。誰に教わったのか知らないがなかなか上手だ。もう一つは碁石を置く音。これは莠だ。莠は一時算術に凝っていたが、ここしばらく碁に打ち込んでいる。あるときに蘭が都で買ってきた楮胤（ちょいん）の棋譜を見て、急に何か悟るところがあったらしく、以来、何かという碁石を並べている。楮胤とは数百年前の碁の名人で、その棋譜が残っていたというのはいかにも怪しげであるが、書いてある内容はたいしたものであるらしい。三つ目は本を読む声。これは藹だ。藹の奇妙な術は年々進んでいる。どのような書物でも、声を出して読むと、うまくいけば一度で、悪くても二度で覚える。一冊

の書物を一切見ることなく丸ごとすらすらと唱える。書いてある内容を理解しているとは限らない。とにかく記憶してしまふのだ。韋家には、木や竹に記したものから、紙に書かれたものまで、さまざまな書物が伝わる。屋敷の奥の書庫の収められた全てを藹は頭の中に入れてしまおうとしている。

奇妙な従弟と弟であるから、いずれもまだ独身で、三人はよくこの家で、互いに話すのでもなく、それぞれに勝手なことをしている。莠には妻を迎える約束ができていて、韋荘が合格したら日取りを決めるはずだったのだが、この先のことは見えなくなってしまった。

韋荘は裏の戸を叩く。

「お出ましですな。待っておりますぞ」

蘭が顔を出す。

二人の弟は、兄が入ってきてからも知らん顔だ。一度自分のことを始めたら、周囲で何があるうと全く目に入らない。

「相変わらずだ」

弟の様子に韋荘は微笑む。

この二人が韋家の後を継ぐのは無理だ。己がやはり貢挙を受けて官人となるしか韋家を再び盛り上げるのは不可能である。弟たちのためなら、いくら苦勞しても構わない気になるから不思議だ。

莠の碁盤を覗くと数個の石しか置いていない。それを見てじっと考えている。莠の頭には何十手もの先の局面があるのだろう。藹が読むものを聞けば史書のような。藹は書いてある中身に興味があるのではなくて、字面を覚えることが面白くてならないのだ。

老婆が隅で米と粟を煮ている。二人の弟の日常はこの老婆が世話している。本当は楊爺がここに住めばよいのだが、韋荘の妻がとにかく楊爺を少しでも遠くにしておきたくて、それを許さない。

「さつき、楊爺が池にいこうとしていましたから、呼び止めまして、ここで夕飯を一緒に食おうと言ってやりました。きっと魚でも釣ってきてくれますよな」

「狐潭の魚か。久しぶりだな」

「料理は俺に任せていただきましょう」

蘭は腕まくりしてみせる。

「せいぜい楽しませてもらうか」

韋荘は初めてくつろげそうな気分になる。

蘭は老婆と一緒に何やら作り始め、旨そうな匂いが立ち始める。外が真っ

暗になって、蛙の声が大きくなって、藪の声もかき消されるばかりとなる。

「鯰が釣れましたぞ」

楊爺がぐいと裏口から入ってくる。

「これはみごとな大物ですな」

蘭は鯰の髭を引っ張る。

「お坊ちやまが無事にお帰りになったお祝いでございます。それに、お酒も

旦那さまよりいただいております」

楊爺は腰に下げる馬の皮袋を叩く。

その顔を見ると、この男のために、合格できなかったのは残念であったと
韋荘は思うのである。